有識者懇談会の主な意見の状況

資料1

視点		有識者懇談会委員から出された関連意見
新博物館の目指すべき姿に関する意見	【視点1】 山形ならではの特色を打ち出すこと	・山形県の4地域は、それぞれ特性がある。各地の食文化、祈りの文化、民話、方言、自然、地形、最上川の歴史、樹氷など、山形にしかない、山形県ならではの文化、歴史、自然を、現代の生活につなげて紹介することで身近に感じ魅力になる。
	【視点2】 次世代への継承	・「普遍的な価値」があるものをブラッシュアップし、なぜそれが大事なのか、残していかなくてはいけないのか考えるきっかけをつくることにより、郷土への愛着につながる。 ・社会が変わっていく中で、博物館が収集している変わらないもの(リアル)に大きな価値が生まれる。変わらないものへの安心感が、人が集まるということに繋がるのではないか。
	【視点3】 観光誘客など交流人口の増加により地域の活力向上につなげること	・その土地の人々の暮らしと関連したもの、風土を作ってきたものには魅力があり、その魅力は観光誘客にもつながる。 ・博物館の内容だけではなく、交通政策、観光政策も含めた広い視点で考える必要がある。周辺の商業施設や地域企業との連携により経済効果を高めることが重要である。 ・博物館の収益性が担保できることで、地域、子ども達、文化財の保存・修復にも還元できる。
	【視点4】 県内博物館等のネットワークの核としての役割	・山形県を一つの博物館ととらえ、各地域の小さな博物館や資料館等を横につなぐプラットフォームとなるのが、メインとなる県立博物館の役割。 ・それぞれの地域の文化を継承するのが、それぞれの地域の博物館であり、それらをつなげるのが県立博物館の役割。 ・これからは横の連携が必要になる。博物館の目的に、教育、研究、楽しみなどがあり、これらは観光、移住に繋がっていく。 ・地域、産業、自治体同士など、さまざまな立場の連携がある。何のために連携するのか、目的がはっきりしていないと連携のための連携になってしまいうまくいかない。
	【視点5】 誰にでも利用しやすいインクルーシブな施設を目指すこと	・インクルーシブな視点が重要であり、誰にでも利用しやすい博物館を目指す必要がある。そのためには、施設面での問題と人間でケアできる問題を分けて検討する必要がある。
	【視点6】 災害への対応力強化	・地形や地質の遺産を中心とした景観であるジオパークとの連携ができれば面白い。宮城県には、ジオパークである三陸の国立公園に震災の遺構があり、災害の啓発や防災に役立てることが出来る。
博物館が担うべき機能に関する意見	【視点7】 研究機関としての機能の充実	・博物館の魅力を伝える基礎となる研究機能が重要であり、研究機関として位置づけることが重要。 ・博物館の資料を研究対象として考えられるように、いろいろな方がアクセスしやすいようにすると、直接研究したり、山形での暮らしを考えたり、研究職を求めたりすることにも繋がる。 ・リアルだけでなくデジタルでもアクセスできるということが重要。様々な地域や世界、時代を超えてアクセスができる事が興味関心に繋がる。また、アクセスしやすいということをオープンにわかりやすく発信していくことが必要。 ・博物館は「ヒト」が作っていくものであり、学芸員の研究環境の整備も含めた人材育成のあり方や大学等との高度人材の共有などについて議論が必要。 ・学芸員にスポットを当てて発信していく事も面白い。熱量が高く、興味深い話をしてくれる方がいる。学芸員のトークバトルなどを見てみたい。 ・高度な人材を社会の様々なところで共有していくという考え方がある。大学教授やデザイナーなどを一部共有していく柔軟な発想もある。 ・資料を蓄積していくことにより何かを生み出していく学術的な専門家の視点が必要。 ・今にもなくなってしまいそうな文化がたくさんある。それらをリスト化し残していくことはとても大事なこと。 ・「普遍的な価値」があるものをブラッシュアップし、なぜそれが大事なのか、残していかなくてはいけないのか考えるきっかけをつくることにより、郷土への愛着につながる。
	【視点8】 集客力向上への取組み	・例えば、食文化や歴史を紹介する展示企画と関連づけて、在来野菜を買ったり、郷土料理を食べられる施設があると、収蔵資料の理解が深まり、展示企画からの誘導もでき、集客につながる。 ・博物館に求められているニーズを学芸員が把握し、学術的に必要なことをつなげることが重要。 ・ニーズを探ることが非常に大事。その際、データ(事実)をベースに考えるべき。
	【視点9】 ファンを掴む取組み	・ファンの入口を掴むのが大事。寄附の窓口を作り、クラウドファンディングやボランティアなど、支えの仕組みを作る。支え手と博物館の関係性をどんどん濃くしていくのが良い。 ・県民になじみのある場所にするためのゆるキャラ、愛称など民間のブランディング手法も必要。 ・関係人口を増やし、来館者データを集め、意見やアドバイスをいただく事が大事。 ・利用者の足跡、効果をストックしていくが大事。そうすることで、教育現場、高齢者など分野、年代、地域で求められていることが分かるのではないか。
	【視点10】 多様な主体との協働	・東北芸術工科大学の文化財保存修復学科など大学との連携を是非して欲しい。また、保存修復研究センターの活用は地域文化財を守っていくことにも役立つ。 ・他の県立の施設との関係など既存の博物館との連携及び位置づけの整理が大事。 ・博物館で全てを担うのではなく、県産業科学館など既にある施設と機能を分担する形もある。
	【視点11】 誰でも博物館を活用できるような取組み	・住民の学べる場づくりなど、コミュニティの参加や誰でも活用できるような配慮が必要。 ・障がいをデザインの力で解決するインクルーシブな博物館、“見る”だけでなく“感じる”“触れる”博物館を目指してほしい。障がい者福祉にもつながる。
	【視点12】 子どもの利用促進	・民話を絵本にしたり、体験型の展示とするなど、子ども達が興味を持つような取組みがあると、博物館に行くきっかけになり、楽しく遊びに行ける。 ・学校で学んだことを補完できる展示企画があると、休日に家族で訪れる。親も郷土について学びなおして子どもに伝えていきたい。 ・子ども達だけで訪れることができる企画を実施してほしい。

視点		有識者懇談会委員から出された関連意見
博物館が担うべき機能に関する意見	【視点13】 デジタルの有効活用	・開館までの変化を見据えて、その中で、リアルならでは、オンラインならではの体験を設計することが重要。 ・通常の展示とARやVR技術等を組み合わせて、ハイブリッド型の体験的な楽しみができると学びも多く楽しめる。 ・博物館法改正され、コロナ禍の中、デジタルアーカイブ化が業務として入ってきた。家にいながら博物館の展示を見て、博物館にいって実物を確認するなどがこれからのスタイルになるのではないか。 ・直接来館とデジタル上での利用という2つの利用法は並走していくと思われる。 ・山形県の4地域をまとめるようなデジタルの活用と実体験の場としての博物館という形が、県外と県内のニーズそれぞれに合致するのではないか。 ・単に博物館資料をデジタル化するだけではなく、組織をデジタル化していかなくてはならない。地域の施設それぞれがフルスペックでデジタル化するのではなく、統一したデジタル化により横断的に結ぶなど組織横断的な動きが大きな課題であり、実現できれば効率化が進む。
	【視点14】 実験場的なプログラムの実施	・その時代に応じたものが展示できるような自由な部屋があると面白い。 ・食文化や風習など、将来に残したい情報を伝えるため、おばあちゃんの手仕事などを見せることができる自由な部屋をつくると、様々な人がきて、後継者育成などにもつながるのではないか。 ・様々な企画に挑戦できる実験場的な場所やプログラム、一回試しにやってみる機能があるとよいのではないか。それをデジタルで実現することもよい。
	【視点15】 効果的な情報発信	・情報の更新、発信が重要で難しいこと。関係者それぞれがサイトの情報を更新できるようにするなど参加型の情報の更新、発信ができれば、情報収集のスピードが速くなり、横のつながりもできる。 ・継続して来館者を確保するには、たくさんある収蔵資料から新たな魅力や見解等を提示し続ける必要がある。 ・博物館の仕事を多くの人に知ってもらうため、わかりやすく「見せる」ことが必要。博物館にまつわるすべての仕事・役割を見せることで、より興味を持ってもらえるのではないか。
開館までの取組みに関する意見	【視点16】 開館までの取組み	・新博物館開館までの10年間に何ができるかということを考えたら良いのではないか。博物館の役割を多くの人に知ってもらうことが重要。 ・この間にコミュニティをつくり、成長させ、オープンにつなげていくような仕掛けができると面白い。 ・開館後継続していくためにも、開館までのプロセスの可視化と地域を巻き込むことが大事。 ・道の駅、物産館、駅や空港の一区画を利用した展示を行い、開館までのPRをすると良い。 ・一般の方を巻き込む事が開館前のPRに繋がる。参加型のシンボルがあると自分事と感じられる。 ・開館までのプロセスが大事。意義・定義の決定、建物の決定という2つのプロセスがある。 ・今後、何のためにやるかという「使命」と誰がどのように支えるのかの「マネジメント」について議論しなければならない。 ・目標（アウトカム）について、来館者数だけではなく、例えば、人々の幸福、well-being（ウェルビーイング）などを目標として設定し、博物館の成果をきちんと評価する必要がある。入館者数だけではないやり方にしていかないと、社会全体に影響を与えるような博物館にならないのではないか。 ・目標（アウトカム）については、数値的な目標を考えた場合、アウトカムの段階で二段階、三段階のものを作って、最終段階にwell-being（ウェルビーイング）のようなものを設定することが重要。 ・運営する人員、来館者ともに減少していくことは止められる事象ではない。どうやってプロジェクトを進めていくのかが大切。莫大な予算を博物館事業だけに回すのは難しいと考えられるので、横断型として各部署と一緒に協力することが重要。 ・博物館というと、どうしても建物にこだわってしまうが、建物というのは一つの手段であって、そこにある機能が広がっていくという考え方をした方が良い。博物館という言葉をやめてミュージアムと呼ぶのが良いと思う。コミュニティの発想を踏まえて、一般の方と意見交換をしながら、ミュージアムをデザインしていく事がこれからは重要。